

# 災害の「自分事化」はどうすればできる??

～リスク情報の発信をめぐる論点・争点～

広島県立広島国泰寺高等学校

校 種	高等学校	本取組に関わる 資質・能力	知識及び技能	○
対象学年等	1～3年生		思考力、判断力、表現力等	○
教科等	総合的な探究の時間		学びに向かう力、人間性等	◎
内容等	先端研究開発を考えるオンライン探究学習			

## 1 実施内容

- 3つの高等学校と、先端的な研究開発を進める拠点（土木研究所ほか）をオンラインで結んで、遠隔合同授業を行う。
- 遠隔授業の全体進行は、広島大学の担当者（T1）が行う。各教室での指導は、各学級の教科担任等（T2）が行う。高校生自らファシリテートするのは差し支えない。
- 参加校には、広島大学よりサポートスタッフ（T3）が派遣され、環境設営、授業運営支援、教師・生徒の ICT の活用支援等が行われた。
- 授業では、個人端末を使って生徒が意見表明する機会を設ける。加えて、生成 AI を活用した遠隔授業支援システムを活用して、学校間の意見交流を促進する。

## 2 実施日

令和8年3月10日（火）

## 3 参加校

- 高等学校 3校（1・2・3年生 75名程度）
  - ・広島県立広島国泰寺高校 50名（1年23名、2年27名）
  - ・長崎県立佐世保南高校 18名
  - ・熊本県立済々黌高校 7名程度

## 4 指導案

[01\\_実施計画 ver1.6.3月【高校総探・スマ防SIP】\(HP掲載用\)-1.pdf](#)

## 5 本授業までの経緯

事前学習として、自分の体験をもとに、スマート防災について考える学習を1月22日（木）に行いました。災害リスクを自分事として受け止めにくいという課題に対して、生徒が事前にまとめてきた「自分の災害経験」についての発表から始まりました。各校から代表生徒が発表し、「避難指示が出ても動かなかった」「家族と別々の場所において迷った」など、自身の経験を通して災害時の行動をふりかえりました。これにより、生徒たちは、災害リスクについて正しい知識を持っていたとしても、現実には適切な防災行動をとらない場合があるという傾向を確認しました。

この現状を踏まえ、生徒はスマート防災の研究者が開発した「仮想洪水体験システム」を使って、倉敷のリアルな街並みでの洪水をVRで再現されたゲームを体験することで、災害の恐ろしさを実感し、「仮想洪水体験システム」の長所と短所を出し合いました。「リアリティが高く、言葉よりも危機感を感じられる」「実際に避難して災害意識が高まった。仮想でも経験することが大事」といった積極的な評価がある一方、「ゲームとして割り切ってしまう」「時間が経ったら危機感が薄れるのではないか」「普段運動していない高齢者も間に合ってしまった」といった意見も出されました。

生徒たちは、研究開発の成果をただ受け入れるのではなく、そのプロセスに積極的に参加し、批評・対話に関わっていく意義を実感するとともに、主体的に自他の安全な生活の実現に向けて考えることができました。



今回の取組に加えて、令和8年1月27日（火）に広島市消防局と連携した特殊災害合同訓練を実施しました。

生徒会執行部等が中心となり、充実した訓練となるよう消防局と協議を重ね、当日を迎えました。当日は、約40名の消防局関係者が来校され、科学部化学班、校友会執行部、放送部の数名が参加し、消防機関と学校関係者が連携して化学事故への対応を円滑に行うという目的のもと訓練を行いました。実際に、使用する道具や救助の流れを忠実に再現し、リアリティのある訓練となりました。特殊な対応が必要なため学校のみで行うのは難しく、今回の消防局との合同訓練はとても有意義な経験となり、災害リスクの理解につながりました。

特殊災害合同訓練についてはこちら↓

<https://www.kokutai.ji-h.hiroshima-c.ed.jp/zen-news-detail.php?id=789>

## 6 本授業の様子

参加者は、事前課題で単元の問いに関連する記事や論文を読み、自分なりの考えを提出してから授業に参加しました。代表者が論文を読んで考えたことや感じたことを発表しました。生徒からは「避難所での女性の居心地の悪さを解決するためには女性の防災担当者を増やすことが必要不可欠」「同じ災害でも性別や置かれた環境によって被害の大きさが違うことに衝撃を受けた。災害は社会のゆがみを増幅させる装置であることを痛感した」といった意見が出されました。

生徒たちは「仮想洪水体験システム」が、多くの人々が災害リスクを知りながら、何も行動しない現状を変えることに役立つかどうか評価し、さらに改善するための提言を、本授業で行いました。この他にも生徒たちは、「浸水リスク個別伝達システム」、居場所にあわせた浸水情報をリアルタイムで知ることができるLINEを使った研究成果についても同様に考えました。



ブレイクアウトルームで3校の生徒がグループごとに協議をし、提案書をまとめました。それぞれの地域の実態を踏まえながら意見交流をしていたので、とても有意義な時間となっていました。

提案の作成にあたっては、コメント機能を使って、他グループのGoogle スライドに賛否を書き込んだり、ブレイクアウトルームに研究者を招いて直接質疑したりして、提案をブラッシュアップしていきました。その結果、「高齢者も仮想洪水体験できるように、町内会でVR体験会をしてはどうか」、「LINE ポイントを付与することで、浸水リスク伝達システムの普及をはかってはどうか」、「LINE のユーザー層や発信力を考慮して、外国人ユーザーの多いWhatsApp など他のアプリを使ってはどうか」などの案が示されました。

今回の取組は、生徒が主体となった防災教育を中心とし、他教科及び特別活動等とも関連付けながら教科横断的に進めました。

学習したことをもとに、地域のみならず、オンライン等を活用して防災教育の大切さを全国に発信することにもつなげられる取組となりました。

また、広域交流型オンライン学習を活用することにより、他校との交流もでき、それぞれの地域の実態に応じた防災への取組や意識等についても広く知ることができる学習の機会になります。

授業の具体についてはこちら↓

[https://sip-dcc.hiroshima-u.ac.jp/class\\_practice/20260310inquiry-based-learning/](https://sip-dcc.hiroshima-u.ac.jp/class_practice/20260310inquiry-based-learning/)

## 7 参加者の感想

実際に研究機関とつながり、自分たちの考えを提案したことについては、課題に対しての自分の意見や、人と交流する中で生まれた考え方に対して、専門的なフィードバックがその場で返ってくるので、ただ交流するだけで終わりではなく、一歩先へ自分の考えを深めることができるところが良いと思いました。

この授業を受ける前後での「先端技術」や「社会問題」の見方が変化しました。何となく今までは「先端技術」は難しそうで私たちには理解できないし、「社会問題」は漠然と自分とは遠いところにあると思っていました。しかし、私たち高校生も積極的に参加、発言することが社会貢献に繋がったり、災害対策の先端技術でも、私たちにとって身近な LINE が使われていたりするということを知りました。「なんとなく」や「めんどくさい」みたいなイメージが先行して、知ることを放棄してはいけないと思いました。

日本の防災関係の仕事についている人は女性が少ないという話がありましたが、今回この防災の授業を受けている人は、女子生徒が多かったように思います。私たちが主体的に防災を発信していくことが大切なのかなと思いました。

防災は自然の状況とその自然被害の大きさだけが関係するのではなく、常日頃から解決が求められている社会問題が災害時に一気にしわ寄せをしてきていると思った。ジブンゴト化するためには、リアリティを追及すると同時に様々な場面・人に合った VR にしていくことが必要であると思う。

2026年度 広域交流型オンライン学習のスケジュール↓

[https://sip-dcc.hiroshima-u.ac.jp/education\\_column/lesson-schedule-2026/](https://sip-dcc.hiroshima-u.ac.jp/education_column/lesson-schedule-2026/)